

近代文学研究叢書
第四十卷

昭和49年10月15日 印刷
昭和49年10月25日 出版

[¥ 2500]

著者

昭和女子大学近代文学研究室

発行者

東京都世田谷区太子堂一丁目七番地
小林寅次

印刷者

東京都千代田区神田錦町三丁目十四番地
梶原忠幸

発行所

東京都世田谷区太子堂一丁目七番地
昭和女子大学近代文化研究所
振替口座 東京 一七〇八六七番
電話代表 (422) 五一三→番

近代文学研究叢書

第四十卷

昭和女子大学

近代文学研究室

監

修

吉村 本保 人浜 能成 中内 辻玉 島山 佐佐 笹佐 坂木 河金 片荻 岡太 上石 石池

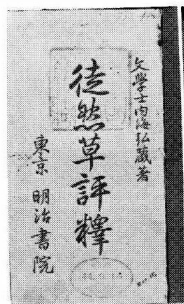
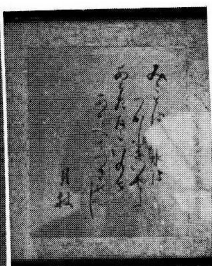
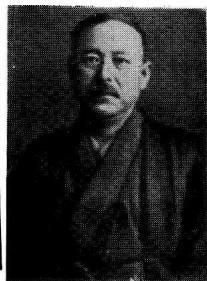
田松 間見 勢瀬 林井 田伯 藤沢 々本 藤子 桐原 田井 森田 田
坂 徳 藤村 宮 木由 保 井保
澄定 久門 頼正 謙幸 體梅 幹美 八五 実健 顯泉 三磯 延吉 龜

夫孝 雄都 吉郎 賢勝 二濯 鑑助 二允 友二 明郎 郎修 英二 智水 生郎 吉男 貞鑑

(國語学) (近代文学) (国文学) (近代文学) (美文学) (国語学) (近代文学) (英文学) (仏文学) (国文学) (比較文学) (英文学) (文法学) (国文学) (国文学) (英文学) (和歌文学) (歴史学) (英文学) (和歌文学) (近代文学) (比較文学) (英文学) (児童文学) (国文学) (国文学)

内海月杖(一)

← 肖像



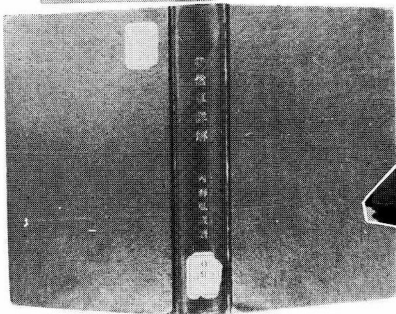
→ 「徒然草評釋」

明治四十四年九月刊
(国立国会図書館蔵)

← 「われから」

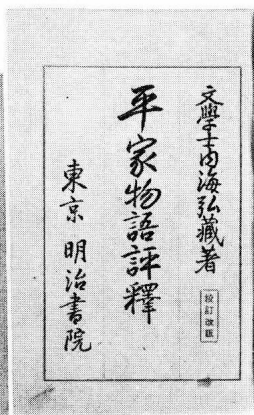


明治三十九年六月刊
(昭和女子大学蔵)



→ 「徒然草評解」

大正八年十月刊
(昭和女子大学蔵)



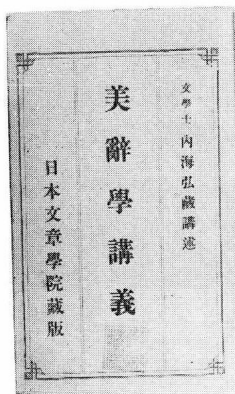
「平家物語評釋」

大正四年九月刊
(昭和女子大学蔵)



「孝子画新」

大正三年十二月刊
(昭和女子大学蔵)



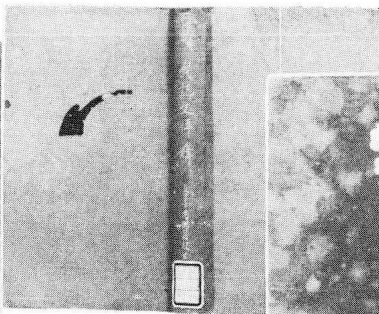
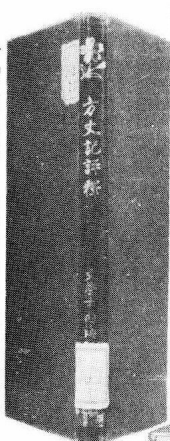
「美辭學講義」

明治四十四年刊
(昭和女子大学蔵)

内海月杖(二)

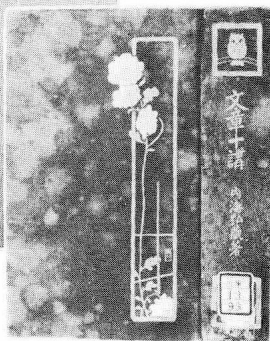
→「方丈記評釈」——大正五年七月刊

(昭和女子大学蔵)



↑「戦記文評釈」
明治四十五年二月刊

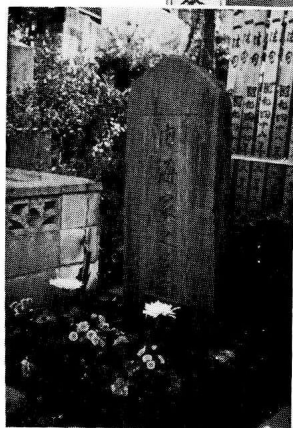
↗「文章十講」
明治四十三年十二月刊
(昭和女子大学蔵)



→ 誕生碑——神奈川県

伊勢原市大山町
「変態妙文集」——昭和二年十
月刊

(昭和女子大学蔵)

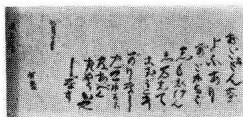


墓——東京都染井霊園

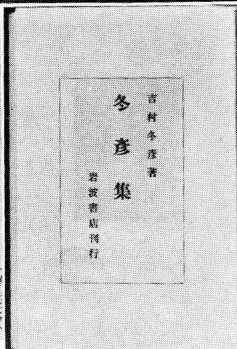
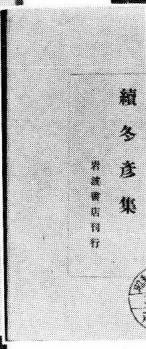
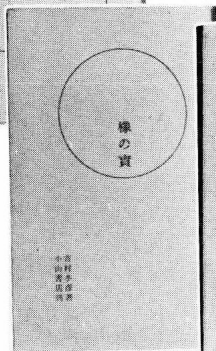
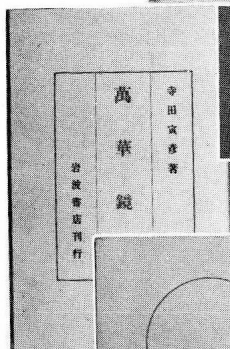
生家——神奈川県伊勢原市大山町

寺田 寅彦 (一)

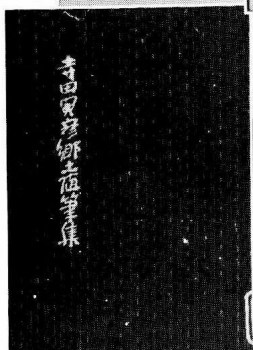
→ 筆 蹟



← 肖 像



↑ 「萬華鏡」——昭和四年四月刊 (昭和女子大学蔵)
→ 「橡の実」——昭和十一年三月刊



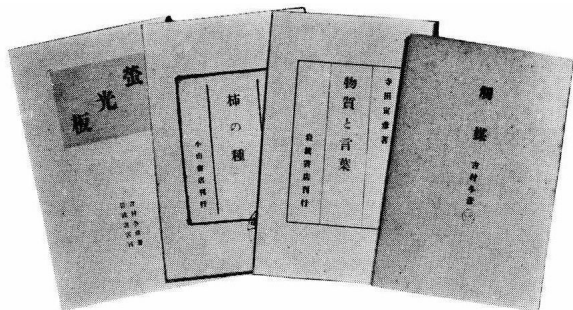
「寺田寅彦郷土隨筆集」
昭和三十二年九月刊
(昭和女子大学蔵)

「続冬彦集」
昭和七年六月刊
「冬彦集」——大正十一年一月刊 (昭和女子大学蔵)

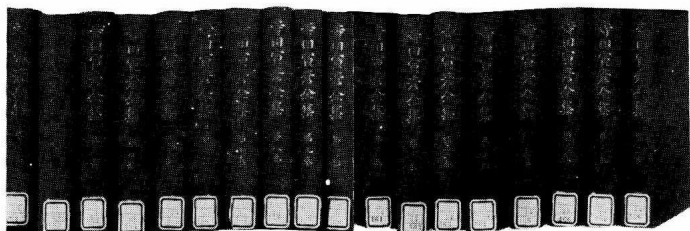


寺田邸址——高知市小津町

寺田寅彦(二)



↑「螢光板」昭和十年九月刊
 ↑「柿の種」昭和八年六月刊
 ↑「物質と言葉」昭和八年十月刊
 ↑「觸媒」一昭和九年十二月刊 (昭和女子大学蔵)



↑「寺田寅彦全集」一昭和二十五年七月～二十六年十月刊 (昭和女子大学蔵)



墓一高知市初月



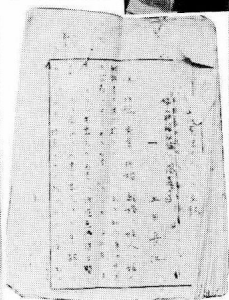
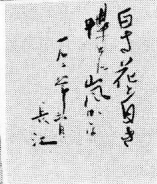
「銀座アルプス」一昭和二十四年十月刊
 (昭和女子大学蔵)

生 田 長 江 (一)

← 肖像



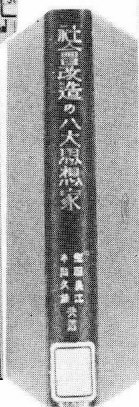
← 筆蹟 (長江文庫蔵)



← 「最近の文芸及び思潮」——大正四年五月刊 (昭和女子大学蔵)



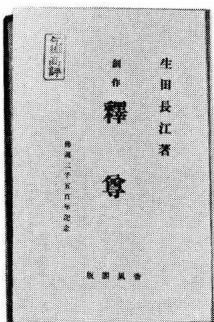
← 「社会改造の八大思想家」
大正九年十二月刊
(昭和女子大学蔵)



→ 「文学入門」——明治四十年十一月刊
「最近の小説家」——大正元年九月刊
(昭和女子大学蔵)



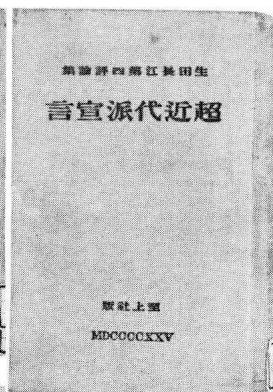
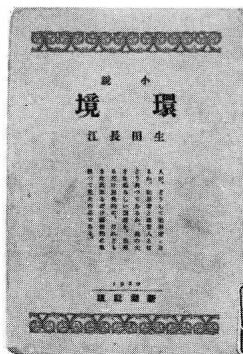
→ 「反響」——大正二年四月创刊号
(昭和女子大学蔵)



→ 「創作釈尊」——昭和十年二月刊
(昭和女子大学蔵)

生 田 長 江 (二)

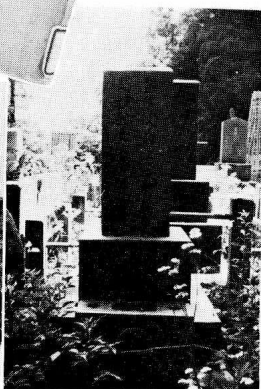
→ 「超近代派宣言」——大正十四年十二月刊
 「環境」——大正九年十二月刊
 (昭和女子大学蔵)



「圓光以後」——大正八年二月刊
 「篡奪者」——大正十年七月刊
 (昭和女子大学蔵)



顯彰碑—鳥取県日野郡日野町 延暦寺



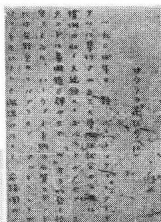
墓—神奈川県鎌倉市 長谷寺

牧野信一(一)

← 肖像



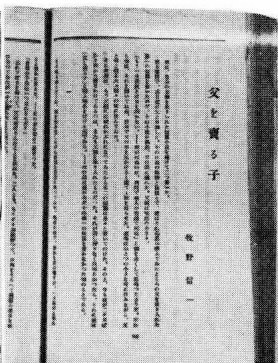
→ 筆蹟



牧野信一

南風譜

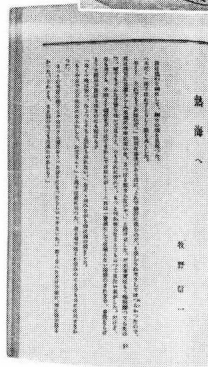
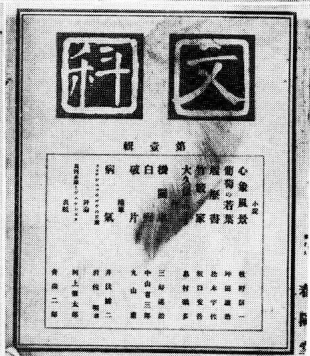
← 「父を売る子」 「新潮」 大正十三年五月号所載
(昭和女子大学蔵)



→ 「作品」 — 昭和五年
五月创刊号

↑ 「南風譜」 — 昭和十
六年八月刊
(昭和女子大学蔵)

← 「文科」 — 昭和六年十月创刊号
(昭和女子大学蔵)



→ 「熱海」 — 「新潮」 大正十二年六月号所載
(昭和女子大学蔵)

牧野信一(二)

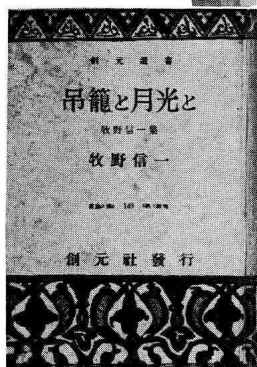
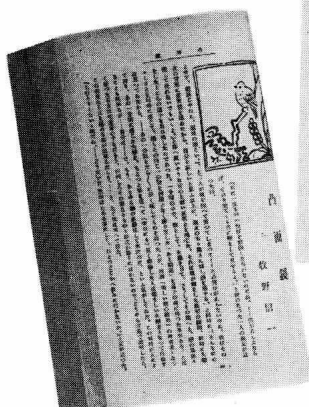
←「隨筆」——大正十二年十月より編集

(昭和女子大学蔵)



→「凸面鏡」——「新小説」大正九年八月号所載

(昭和女子大学蔵)



「吊籠と月光と」
昭和二十四年七月刊
(昭和女子大学蔵)



↑「西部劇通信」——昭和五年十一月刊

←「心象風景」——昭和五年七月刊

(昭和女子大学蔵)

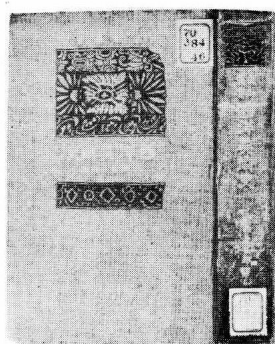


石井直三郎(一)

← 肖像

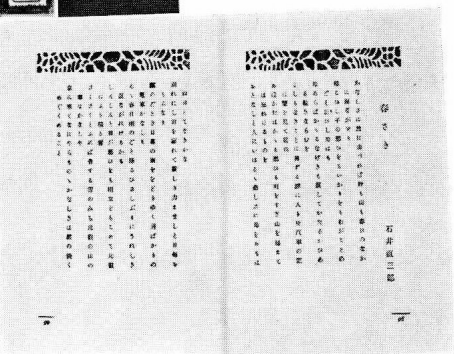


← 筆蹟(石井家蔵)

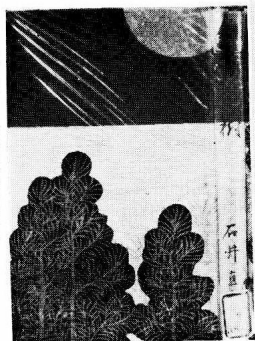


→ 「西洋美術史」昭和九年四月刊
(昭和女子大学蔵)

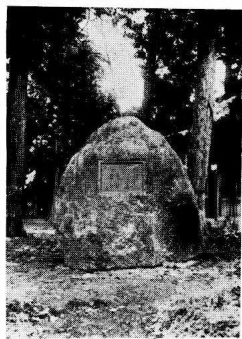
「春さき」——「水鏡」大正三年四月号所載
(昭和女子大学蔵)



→ 「青樹」——昭和六年十月刊
(昭和女子大学蔵)



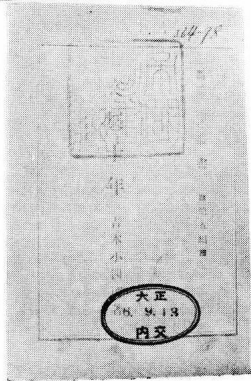
✓ 「徒然草新釈」——大正四年三月刊
(国立国会図書館蔵)



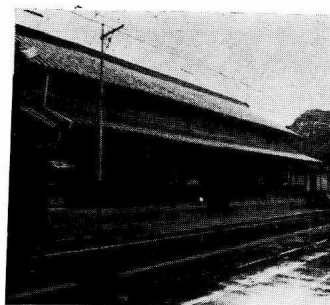
歌碑——兵庫県相生市



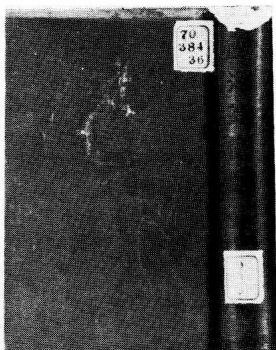
→ 「文展十年」——大正五年十月刊
(国立国会図書館蔵)



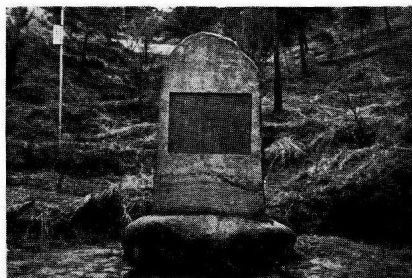
石井直三郎(二)



↑ 生家の門—岡山県小田郡矢掛町



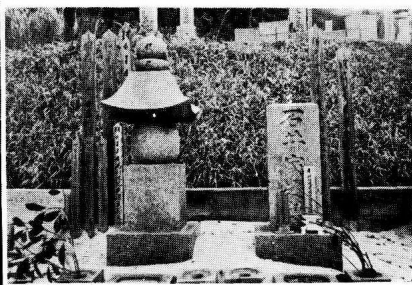
←「美術叢書西洋美術史」—大正五年四月刊
(昭和女子大学蔵)



←「石井直三郎歌集」—昭和四十四年八月刊
(昭和女子大学蔵)



↑ 歌碑—
岡山県小田
郡矢掛町



墓—岡山県小田郡矢掛町

歌碑—愛知県名古屋市長久寺納骨塔

目次

口	第四十卷の成立	昭和女子大学近代文学研究室……(一四)
凡	例	昭和女子大学編集室……(一九)
内	海月	近代文学研究室……(二)
寺	田寅	近代文学研究室……(五七)
生	田長	近代文学研究室……(二七)
牧	野信	近代文学研究室……(三三)
石	井直三	近代文学研究室……(三七)
近代文学表	40	近代文学研究室……(四五)
末付	記	昭和女子大学近代文学編集室……(四三)

第四十巻の成立

本巻は昭和期第十五巻として、昭和十年十二月から十一年四月までに歿した左記五名の研究調査を収めた。

内海月杖は国文学者。本名弘藏。明治五年三月二十三日、相模国中郡（神奈川県伊勢原市）大山町に父政雄、母美代の一子として誕生した。父は神官で大山阿夫利神社神官の他神道本局の幹事等役職を多く持ち、家は信者達の宿泊する参詣所でもあった。幼少の頃は当時詞官在任中の権田直助に深い影響感化を受けた。明治十八年に上京して独逸学協会学校（現在独協学園）に入学したが、特に独語教師ウンケルに愛され、後年独逸詩の評釈を試みる程の語学力を養った。二十一年、第一高等中学校（後の一高）独文学科に入学、上田敏らと学んだが後国文学科に転科、落合直文を中心に浅香社を結成した。帝国大学文科大学在学中は帝国文学会に発起人として名をつらね上田万年には特に目をかけられた。卒業後は国文学界に進出、鉄幹とともに中学用国語読本の編集や「徒然草評釈」の起稿に着手、又「明星」の同人として評論や美文、訳文を掲載した。晩年、明大教授他二、三の大学の講師も兼ねながら一方大学野球に情熱を注いだ。【中等教科】「日本文学史」「徒然草評釈」「平家物語評釈」「方丈記評釈」「枕草子評釈」等多くの解説書を出し斯界に貢献したが、昭和十年十二月七日、脳溢血の

ため六十四歳で死去した。

寺田寅彦は物理学者、随筆家。筆名は吉村冬彦、藪柑子、牛頓、寅日子、木螺山人他。明治十一年十一月二十八日、東京麴町に父利正、母亀の長男として誕生。父は高知県士族、陸軍会計監督。十五歳の時肺炎カタルを患って休学、静養中文学書を読みあさった。明治二十九年熊本高等学校に入学、夏目漱石に英語、田丸卓郎に数学、物理を学び、科学、文学両面に深い影響を受ける。三十二年九月、東京帝国大学物理学科に入学、漱石の紹介で正岡子規を訪れる。大学卒業後は大学院で実験物理学と取り組み三十七年東京帝国大学講師となる。四十一年「尺八の音響的研究」で学位を授けられ翌年助教授、大正五年東京帝国大学教授となる。地震に関する研究も多く昭和五年「墨流しの現象」を発表した。又学者として研究生活に死頭するかたわら文章を書くことに意欲をもやし、漱石を囲んで「木曜会」に集まるメンバーには彼のほか松根東洋城、森田草平、鈴木三重吉、野上豊一郎、小宮豊隆などがいて、漱石からばかりでなくこれらの人達からも一目おかれていた。大正八年、胃潰瘍の発作で入院、その危機を克服してその文章は更に精彩を加え、科学随筆の遠く及ばぬ知性と風格を備えてきた。共著「漱石俳句研究」(大14)を刊行、連句の実作も試みた。音楽や絵画にも関心を持ち映画批評も書いた。「藪柑子集」(大12)「萬華鏡」(昭4)他すべて「寺田寅彦全集」全十六卷(昭11)に収められている。昭和十年十二月三十一日、転移性骨腫瘍の為、五十八年の生涯を閉じた。